

鳴門教育大学

I. 実 施 報 告

(1) 実施責任者報告

鳴門教育大学長 野地 潤家

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

四国地区の7国立大学では、昭和61年度から四国地区全域を対象に、大学の教育・研究の成果を広く地域社会に開放する事業の一環として、テレビ放送を利用した大学公開講座を共同で実施してきた。さらに平成2年度からはテレビ放送と平行して、ラジオ放送による大学公開講座も開始された。共同の実施体制としては、四国地区国立大学学長会議のもとに同地区国立大学放送公開講座検討委員会が設置されているが、同検討委員会のもとで、7大学の中から輪番制で、その年度の放送公開講座の運営、実施にあたる大学を実施大学に決め、他大学はこれに協力する体制をとってきた。

平成4年度の実施大学である鳴門教育大学では、公開講座の実施に関する企画及び連絡調整を行うための公開講座委員会の中に、放送公開講座専門委員会が設置された。この専門委員会でテレビ科目とラジオ科目のそれぞれの主任講師の選出と両科目の基本テーマの設定が行われた後、公開講座委員会の了承により主任講師及びテーマが決定された。次いで放送番組の講座内容、テキスト制作、出演講師の選出などの実務に関わる放送公開講座実施委員会が設置され、13回の講座の基本方針や放送内容が決定された。

次に、番組を制作する放送局との関係については、基本テーマ設定の途中から放送局側に大学の意向を伝え、テーマについての理解と協力関係を深めていった。さらに実施委員会で各回の講座内容を詰めていく過程では、担当講師と局側との意見交換が何度も繰り返された。局側からは番組構成、放送素材などについて有益な意見が出され、講師側はそれらを参考にしながら番組作成にあたった。

最後に、四国地区では、放送公開講座の実施を四国4県全域に周知させるための、当初から、4県の県教育委員会に後援を依頼するとともに、各県ごとにマス・メディアへの広報活動を展開してきた。また、テレビ部門が子どもの問題という今日的課題でもあるため、幼稚園、保育所、小・中学校をはじめ、PTAなど各種教育機関や団体などへも受講の協力を依頼した。

2. テーマの選定とそのねらいについて

(テレビ科目)

平成2年の夏、「1.57ショック」が日本中を駆けまわったが、翌平成3年には「1.54ショック」という強震に襲われた。それは厚生省発表の人口動態統計の合計特殊出生率で明らかにされたように、わが国で1人の女性が一生の間に産む子どもの数が、1.54人になったことを意味

する。一方、総務庁の発表によると15歳未満の子どもの人口は、平成3年4月1日現在、約2215万人であり、これは前年とくらべ約68万人の減少である。

このように出生率や出生数の低下は、子どもとは何か、という人間の本質的意義を改めて問い直す必然性をわれわれに提起する。幸い鳴門教育大学は学校教育に関する理論的、実践的な教育・研究を推進するために設立された新しい構想の大学である。それ故、幼児、児童、生徒の成長と発達に関連する研究分野に、他大学と比較して多数の優れた研究者を擁している。こうした有利な諸条件を活用し、子どもの成長や発達と教育との関連を総合的にかつ多角的にアプローチすることを目指して、本テーマが最終的に選定された。

しかもこの講座は、子どもに関わる諸問題を大局的見地と微視的見地の両側面から相互補完的に機能させ、子どもとは何か、という人間存立の基盤を考察すると同時に、子どもが成長し発達するとはどのような事実や事象をいうのか、子どもの全体像の内実を明らかにするために企画されたものである。したがって本講座の主要な目的は、受講生に理論的、実践的な子ども理解の科学的知見を提供することである。

(ラジオ科目)

近年、歴史学、社会学、あるいは建築史学等の学問の諸領域において、「都市」そのものが研究対象として論じられ、「都市論」なるもののブームが喚起されて久しい。これらの研究結果が明らかにした「都市」は、種々の実体的な構成要素と種々の機能とが有機的に結合した「複合体」としての都市という姿であった。

本講座では、このような「複合体としての都市」を、《音》と《音楽》という視点から考察し、言わば「音と音楽による都市論」を展開する。対象とした都市は、パリ、ウィーン、ベルリン、大阪、東京の5都市であり、扱った時代の範囲は、各都市の成立期から現代までである。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

(テレビ科目)

テレビによる自宅での学習は、どうしても講師による一方的な講義になりがちである。したがって学習効果を高めるためには、予習・復習を助ける印刷教材(テキスト)と、教室での学習指導(スクーリング)が欠かせない。

ところで本講座は先ず第一にテキストの作成に十分な時間と構成上のユニークさを具体化する試みが打ち出された。執筆者はいずれも多忙な方々であるため、早い段階で執筆テーマを決め、執筆までの物理的時間を確保することが最大の課題として共通認識された。そこで主任講師は、テキスト刊行予定の約1年3ヶ月前に、第1回の執筆打合せを行った。テレビ番組の内容は何よりもテキストが基盤となって作成されるため、執筆者への心構えが養成されるからである。その上、今回は執筆に当たって従来のテキストではあまり見られなかった新鮮な編集を目指した。それは受講生が各章(これは放映の各回と対応)の内容を簡潔に把握できるように、「本章のポイント」欄を設けたこと、さらに専門用語に解説の項を設置したこと、によってテキストへの親近性を高める配慮を行った。その他、学習で疲れた頭を休めるための「Tea Time」欄を新設し、受講生の勉学への動機づけを工夫した。

このようにユニークなテキストに沿って番組内容が構成されたわけであるが、テキストで触

れられていない側面も極力取り入れ、映像メディアのもつ特性を十二分に活用した番組作りを行った。したがって番組の放映内容とテキストは、相互補完的な関係をもち、番組及びテキストのそれぞれがもつ特性を、量的にも質的にも拡大と深化が加えられたのである。

今回の講座が受講生に多大なインパクトを与えたと予想される講座の一つに、上記の試みと同様に、学習指導の不足を補うために企画された「テレビ講座通信—うずしお—」の発行がある。これは放映開始前に第1号を四国4県の全受講生へ送付し、受講生の受講動機の向上を図った。さらに期間中に3回、放映終了後に1回の、計5回の講座通信を届けたことである。幸い、テレビ講座通信は極めて好評であった。それは放送内容とテキストが相互補完的であると同時に、両者のメディア以外の内容を中心とした情報で構成されたからであるが、出演講師のプロフィールをはじめ、ブック・コーナー、エッセー、受講生からの声のひろば等々、僅か4ページの中に必要な情報がコンパクトにおさめられていたからである。したがって番組、テキスト、講座通信のいわゆる3点セットが相互に補完しあいながら、講座をもちたてていったのである。

四国地区での学習指導は、会場が4県各地におよぶため放送終了後に1回しか開催できないのが現状である。このような改善策の一つとして、われわれは「テレビ講座通信」を発行したのであるが、これは双方向性コミュニケーションを試みた新しいタイプの学習指導といえるであろう。

(ラジオ科目)

本講座では、「音と音楽による都市論」を試みた。その結果、実際に音と音楽を耳で聴くことが重要である。番組では各回30分という枠のなかで、およそ3分の1を音楽鑑賞にあてた。これに対して、印刷教材では、写真や図版を多数掲載し、視覚面からの都市の理解をめざした。講座では、このような聴覚・視覚両面からのアプローチを強調し、受講生に学習の指針を提供した。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

(テレビ科目)

第1回放送の直後から受講生はじめ一般視聴者から「大変わかり易い」という感想が主任講師をはじめ講師の方々へ多く寄せられた。この反響はその後も続き、全13回を通しての特徴である。このことは同時に前項でもふれたように双方向性コミュニケーションの実験的試みとして採用した「テレビ講座通信」に設けた受講生からの「声のひろば」欄にも、多数の肯定的評価の意見が随時掲載されたことから明らかである。しかもわかり易いことだけではなく、受講生の子どもの見る目、さらには自分自身を見る目の変化についての記述が多く、子どもの問題を通して親のあり方の内省をも促したといっていよいであろう。

本講座の受講生の職業分布が、これまでの講座と異質な面は、特定の職業層にかたよることなく、各界各層にわたっており、子どもの問題が親の世代だけでなく、子育てを終えた人々も、まだ子どもをもたぬ人々まで、様々な受講生の参加によって支えられていた講座という特色がみられたのである。

受講生の反応には、この他に種々のものがあるが、受講生同士がインフォーマルな会合など

で本講座の内容、あり方についてよく話題としてとりあげていた。このように何げない空間や場の中で、テレビ講座がコミュニケーションの素材として活用されていたことは、フォーマルな場での提案よりもはるかに重視されなければならない、新しい側面として評価できるものである。

なお、本執筆の段階ではスクーリングがまだ実施されていないため、受講生の意見や感想を調査し定量的に把握することは不可能である。しかし今回はテキストを3000部印刷し、中央の出版社から全国へ市販されたが、売れ行きがすこぶる順調で、出版社側も予想外の好評ということから、番組と相互関係にあるテキストの位置付けを見直すことにもなった。つまり放送を見てテキストを発注した視聴者も多く存在していたことから、番組を評価する一つの指標としてテキストの問題をとらえることができるであろう。

(ラジオ科目)

今回の講座期間中、受講生からのアンケート調査を実施することはしなかったが、個人的に意見を聴取した範囲では講座の内容やそれに対する評価は概ね良好であった。特に、音や音楽を聴く時間を多目に配し、また多彩なプログラム構成を心がけたことが、効果的であった。

5. 印刷教材の作成過程について

(テレビ科目)

放送公開講座実施委員会テレビ部会では主任講師の委員長のもとに、テキストの作成を行った。テキストの章立ては主として発達生態学の視点に立脚し、子どもを歴史的、社会的、文化的、教育的な存在としてとらえる工夫のもとに、総合的かつ多角的に考察して具体化された。放送公開講座用のテキストは何よりも放映する上での基本的な資料でありこれによって番組が規定されてくるほどの影響力をもつため、実施委員会はこれまでに刊行された各大学のテキストを取り寄せて検討し、本学独自のものを作りあげていった。

まず、テキストを作成する上での中心的な課題は、できるだけわかり易く、しかも大学レベルの専門性を維持するということに主眼を置いた。その結果、文章表現を「です。ます。」調にすることにより、受講生にやわらかさと新鮮さのイメージをもってもらおうよう努力した。さらには、図表や写真を多用し、立体感のあるテキスト作りを目指した。しかも各章のはじめに要約の欄を設け、受講生が章の全体像を把握できるような配慮を行った。

本講座テキストのその他の特徴は、章末に「Tea Time」欄を設けて読者の学習で疲れた頭をいやしてもらうよう努め、また巻末には人名・事項の索引を設けたこと、さらには学習を深めるための参考図書を、簡単な内容紹介を含めて紹介したこと、専門用語に解説を加えるなど、さまざまな試みを行って受講生へ学習の動機づけをしたことである。

幸い、このような試みが受講生に評価され、従来にないテキストという声が多数寄せられた。テキストはテレビ番組と不即不難の関係を保つものであるから、十分な検討のもとにユニークな側面を出すことが必要であることを痛感した。

(ラジオ科目)

今回の印刷教材の作成にあたっては、講師のひとりである久保田が一括して担当した。内容が多岐にわたり執筆にも苦労が多かったが、印刷教材ならびに放送講座の内容がそのことで首

尾一貫したものとなった。特にそのことで受講生が、講師側のテーマ設定とねらいをかなり明確に把握したのではないと思われる。

6. 学習指導の実施状況について

(実施日時・会場・出席者数・出席率)

テレビ講座		第 1 回			第 2 回	
	実施日	平成5年1月31日(日)			平成5年2月7日(日)	
	会場	鳴門教育大学	香川大学	愛媛大学	徳島大学	高知大学
	出席者数	51名	31名	67名	47名	14名

ラジオ講座		第 1 回			第 2 回	
	実施日	平成5年1月31日(日)			平成5年2月7日(日)	
	会場	鳴門教育大学	香川大学	愛媛大学	徳島大学	高知大学
	出席者数	11名	19名	31名	17名	5名

講座の種別	出席者数	出席率
テレビ講座	210名	17.2%
ラジオ講座	83名	11.5%
総計	293名	15.1%

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

新構想の教育大学として設立された本学は、社会に開かれた大学として多くの社会的貢献を行っている。なかでも公開講座委員会が毎年実施している企画は、大学教育の成果を広く地域社会に開講し、多数の受講生の参加を得ている。

今回のテレビによる放送公開講座の実施は、恒常的な公開講座とは異なり、大学のキャンパスにこれならない遠隔地の受講希望者へ、大学教育を放送によって送るメディアの特性を十二分に駆使した試みであり、生涯学習のあり方を考える上で重要な役割をはたしたものである。しかもテレビ放送という形態をとるとはいえ、今回の本学の試みは「テレビ講座通信—うずしお—」を計5回、四国全県の全受講生へ送付し、テレビ学習への意欲、動機を文字メディアの手段によって促進化させたことである。このテレビ講座通信には、「声のひろば」欄を設け、ともするとテレビからの一方的な送りという偏りを幾分でも是正できるように、受け手の側からの反応を掲載したことである。これは双方向性コミュニケーションの方法を用いることが、大学教育の地域社会への開放に寄与するという課題を考察する上で、今後、より重視されていかなければならない視点ではないかと考えられる。

さらに一般市民の学習ニーズが何かを十分に把握した上で、放送公開講座のテーマを考察することも大切である。今回の本学のテーマが「子どもの発達と教育」というように、現代社会にあって子どもの問題は極めて大きな社会的課題であることから、受講登録者数が1,221名という多数にのぼったことも、市民のニーズと対応していたと思われる。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

(テレビ科目)

テレビ講座テキスト「子どもの発達と教育」では、子どもを取り巻く歴史的、社会的、文化的、教育的な各観点から多角的かつ総合的に考察されて、しかも平易な表現を使用してわかりやすく叙述されている。このため本テキストは受講生以外からの購入希望者が多く、すでに版元では品切れに近く、現在第2刷のことを検討中である。

大学の授業においても教育学、心理学、社会学等の関連科目では参考図書として推薦できる図書であり、また学部のみならず大学院においても参考図書として活用している。一方、放送されたビデオも一般教養、専門の授業、さらには大学院の授業でも随時使用する予定である。テキストで触れられていない側面の映像がビデオに含まれている、というケースが多く、視聴覚に訴えるメリットを十二分に活用できるため、講義、さらには講演会等でも教材として広く活用できる特徴をもっている。

さらにビデオの場合、県内は無論、県外にまで出かけて収録したものが多く、このような映像の構成は放送公開講座のときにでもしなければ、通常の映像作成ではとても不可能である。したがってこうした制作過程の努力を効率よく活用していく上で、とりわけ大学の授業の中で積極的にとりあげ、学生と討論を深める有力な教材として活用したいと考えている。

出演し制作に携わった大学の教師の多くは、映像というものの持つ意義と役割について改めて見直した、という意見をもっており、このことがこれからの大学での授業の中でこれまでの授業とは異なる展開へ発展するのではないかという副次的な作用がもたらされた。これは放送公開講座への出演講師という立場の参加者が、自己の教授方法を問い直すきっかけとなった現象であり、映像制作が大学教師の授業研究の素材となったことをも意味している。

(ラジオ科目)

大学の授業への活用は、平成5年度の授業内において行う予定となっている。しかし、印刷教材の作成段階で一部授業において、内容を紹介し、学生に理解を求めた。そのことで印刷教材の内容を点検・確認できた他、実際にまとまった期間、授業が活用する場合に生じる問題点も明らかとなった。印刷教材の準備段階で、授業活用を試験的に行うのは、有効であった。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

(テレビ科目)

四国地区の放送公開講座層の実施大学として、今回、はじめて講座の企画・運営にあたったが、以下に問題点と今後の課題を列举してみる。

- 1) 四国地区では7国立大学で輪番制で担当しており、本学は7番目の実施大学であったが、これまでの担当大学からも指摘されているように、各大学によって構成学部等も異なるため、実施に伴う様々な体験が当番校に伝わりにくいことである。経験のノウハウを含めた蓄積が放送公開講座の発展に大きく影響することになるので、はじめての担当大学にとってはまさに背水の陣である。したがって主任講師は丸2年の間、テキストの執筆や校正等で出版社と何度となく連絡をし、しかも直接出向いて話し合うなど、このために要したエネルギーは相当なものであった。しかも交通費等は自弁のため、学会や公的出張のときを利用して出版社

と交渉にあたったが、そのための時間と労力も大きなものであった。少なくとも主任講師への何らかの財源的措置がほしいところである。

2) 放送時間帯の問題はモニターからも受講生からも例年提起されているが、10月から12月へかけての13回シリーズの放映時刻はあまりにも早すぎる。しかも土曜日の放映の場合、週休2日制の企業や官公庁が増えるに伴い、早朝6時（高知県では午前5時45分）からの放映はあまりにも早すぎる時間である。休日をゆっくりとする配慮は起床時刻へあらわれるのが一般的である。今後の大きな課題として放送局との連携の問題もあるが、むしろ深夜の時間帯へもっていく方が視聴しやすくなるかもしれない。いずれにしても時間帯の問題は深刻な問題である。

3) テキスト「子どもの発達と教育」は、定価 2,000円という枠の中で、出版社側の相当な努力のこともあり、ともかく刊行にこぎつけたが、市販という形をとる以上は今後、この値段では到底不可能である。出版社を通さず印刷会社と契約して完成させるテキストと一般の出版社発行のテキストでは、さまざまところに違いがでてくる。テキストも放送公開講座を構成する基本的な要因である以上、内容も含めてできるだけ体裁の立派なものを作ることが、受講生を魅きつけることにつながる。

このような観点からすれば、今回のテキストは構成内容、表現スタイル、外観等を総合的に考察してよくできていると判断できるものである。

4) 今回のテレビ講座では、四国地区のスクーリングが各県1回（但し地元である徳島県では2ヶ所）という極めて少ない回数のため、スクーリングを補う意味でも「テレビ講座通信」を5回発行したことは、受講生の圧倒的な支持を得た。しかしこれは主任講師の企画と構想で1回4ページの通信ニュースを全受講生へ送付しているが、これは関わる時間と労力も相当なものである。原稿執筆、原稿依頼、取材等、ほとんど主任講師が担当したが、複数で担当し編集委員会等を開くことなどの手間隙を考えると、一人の方がすすめやすかったので個人編集を行ったまでである。

実施大学によってはいろいろなスタイルがあるのでどのような方法がよいのかは、一概には言えない。しかしテレビ講座通信が予想外の高い共感と支持を得られたことは、放送公開講座がテレビとテキストという二大勢力だけでなく、むしろその間をとりもつメディアが活用されることによって、その効果がさらに拡大され、また深化されることをはからずも今回の試みが実証したといえるのではなかろうか。

5) 放送公開講座はともすると出演講師を中心とした大学側の教師と放送メディアを駆使して、番組をプロデュースする放送局側とがクローズ・アップされがちだが、影の立役者としてとりわけ大学の事務局の方々の労があつてはじめて円滑に行われるものである。事務局の事務官の仕事を垣間見た限りでも、仕事とはいえ頭の下がる思いであった。こうした人々に支えられて放送公開講座が運営されていることを考えると、感謝とお礼の気持ちを表明したい場が欲しい。幸い、ささやかな紙面ではあるが、テレビ講座通信の最終号に事務局を代表して教務部長に執筆をお願いし、受講生へ事務局の存在を認識してもらうことができた。

（ラジオ科目）

（テレビ科目）に関して述べられたことの1) 2) 3) 4) については、同じくラジオ科目

利用についても該当する。特に3)に関して、ラジオという媒体を用いるため、受講生により具体的なイメージを抱いてもらうためには、印刷教材では多くの写真、図表等が必要となる。そのため、印刷費もかさむので、今後何らかの形で、より積極的な財源上の援助があってもよいのでないだろうか。

大学公開講座では、印刷教材等の大学授業での活用を謳っているが、印刷教材の内容をどのようなレベルにあわせて執筆するのが難しい。放送では、高校卒業程度とあるが、実際、大学授業で利用していくためには、一特に学生の教育という点を考えた場合、ある程度、高度な内容にしておく必要がある。従って、今後はレベル（あるいは対象年齢）によって、番組を編成してもよいのではないだろうか。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 子どもの発達と教育

主任講師：学校教育学部教授 佐々木 保行

(テレビ科目)

「子どもと教育」の問題に関連した放映テーマを検討するよう公開講座委員会から依頼を受け、種々、模索の結果提案した「子どもの発達と教育」が承認されてスタートしたのであるが、突然降って湧いたような混乱を憶えながらも、後に退くことは既に許されないまでになっていた。そこで覚悟を決め、実施する以上はユニークで、しかも現在の社会の課題とも対応するような新鮮な発想で臨むことにした。

テーマがある程度、制約されていたとはいえ、本学の特性である「教育」と「子ども」というキーワードは、はじめてのテレビ放送を企画する上でまことにふさわしいものである。とき恰も平成2年の夏に、厚生省が発表した人口動態統計の合計特殊出生率が1.57人という数字は、マス・コミによって大々的に流布され、「1.57ショック」という言葉を産み出した。このことがその後のさまざまな子ども論争に、火を付ける大きなインパクトを与えることになった。子どもとは何か、という問題は、基本的に人間とは何か、という根源的、本質的意義を改めて問い直す必然性をわれわれに提起することである。

幸い本学は、新構想の教育大学であるため、全国から集まった優秀な教育諸科学の研究者に事欠かない。あとはこの秀れた頭脳をテレビ放送の中でいかに活用し、引き出すかを念頭に置けばよいかが主任講師の腕の見せどころである。しかも他者の適材適所を見つけだし、運用することは、主任講師にとって決して不得手な領分ではない。このような人的資源と上記に触れたタイムリーな社会的課題とをドッキングさせればよいだけである。

ところで、テレビ放送番組の基盤の核となるのは、どのような内容構成をとるかであるが、その大前提となるものがテキストである。今回は受講生の層の多様化を考慮して、大学レベルの内容を維持しながら、かつ平易に叙述し、しかも最新の学問成果を包含することを最大の課題として、これまで経験したことのない試みに挑戦した。受講生がテキストを手にとり、学習したくなるような本とは何かに苦心したが、結果としての出来ばえにはほぼ満足している。但

し、定価の制約があるため、カラーの図表を挿入できなかったことが最大の心のこりである。

最後に、放送公開講座の主任講師を引き受けたとき、未経験だけに大きな危惧を抱いていたのであるが、幸い多数の教官が快くしかも積極的に協力してくれたことは、本当に心強かった。その上、講座に直接関係しない教官までもが暖かい励ましの言葉をかけてくれたり、関連資料の教示までいただいたことは、何よりも有り難いことであった。さらには計画の立案、放送局との交渉をはじめ、学内外のさまざまな事務的業務、各種印刷物の発送、調査活動等々、まさに縁の下の力持ちとして労力をいとわず担当してくれた本学事務局の方々、なかでも研究協力係のみなさんに厚く御礼を申し上げたい。なお、本講座の実施にあたっては四国放送局の方々に格段の協力と援助をいただき、成功裡に終了することができたことに感謝の意を表明したい。

(ラジオ科目) 都市と音楽

主任講師：学校教育学部教授 本田 皐

(ラジオ科目)

20世紀も残すところわずかとなった今、世界、そしてより身近な我々の生活そのものも大きく揺れ動いています。本講座の準備に追われていた私達に、アメリカ・ロサンゼルスでの暴動ニュースが伝えられたことも、いかにも印象的でありました。20世紀に入って世界は都市化され、ほとんどの人々が都市文化の影響を受けるようになりました。

しかし、先の事件が教えたように、現代の都市は我々にとって、かつてのように人間を自由にする所とは言えなくなっています。そんな都市社会を、音あるいは音楽という視点から眺めた時、現代の都市、あるいは旧来の都市は、どのような音や音楽を響かせ、聴こえさせてくれるのでしょうか。そこには、歴史学や社会学では見えてこなかった、都市の本質や意外な側面が現れてくるかもしれません。本講座は、このような背景と期待をもって、準備し、実施に向けて努力してまいりました。

印刷教材は、ひとりの講師が担当し、他の講師はそれをベースに、各回の番組を企画・構成しました。その結果、内容的には実に首尾一貫したばかりか、各回の番組は実に多彩なものとなりました。例えば、パリはピアノを専門とする講師が担当し、ウィーンはヴァイオリン、ベルリンは声楽となり、それぞれの都市が奏でる音や音楽も、幅広いものとなりました。

また、実際の番組収録に当たっても、音楽史を専門とする講師（＝印刷教材の執筆者）が各回の案内役を努めることで、内容的な面だけでなく、特に技術面で、放送局のスタッフとの打合せが円滑に進むなど、かなりの面で苦労が軽減されたように思います。その結果13回分の収録を5日間で終えることができました。

最後に、ラジオによる公開放送講座ということで、我々音楽教育講座の面々が今回選ばれたわけですが、当初はいろんな面で不安もありましたけれど、講座の内容と放送メディアの性格が見事に一致していたということで、随分楽な面もあり、かつ効果をあげることができたように思います。

講師の方々をはじめ、公開講座委員会、大学の事務官や放送局のスタッフの御協力に感謝致します。

Ⅱ. 制 作 報 告

(1) 制作責任者報告

四国放送第一制作部長 胡田 俊一

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

基本方針は、できるだけ解り易く、誰が見ても理解できる番組であること。見やすく、変化があり、動きのある番組であることを目指して制作した。平成2年度に制作した「未来を開く生命科学」と、基本的にその方針は変わらないが、今回は難しい内容のものを難しく作ってしまった、という反省をこめて制作した。

担当大学の鳴門教育大学とは、放送の1年半前、平成3年3月から、メインテーマが決定した時点で打ち合わせに入った。13回各々のテーマ決定の段階で、打ち合わせの中に入れて戴く心づもりであったが、初期の段階であったということもあって、こちらの思惑通りには事が運ばず、多少ギクシャクした感は拭えない。個別の打ち合わせに入ってから、すべてがすべてとは言えないが、内容について十分に議論もし、大学側ともスムーズにいったのではないかと思う。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

今回、鳴門教育大学が取り上げた「子どもの発達と教育」というテーマは、これまでテレビ講座で取り上げられることがなかったテーマだと聞く。今1人の女性が一生の間に出産する子どもの数は1.5人とこれまでになく減少している。それだけに子どもの存在価値は高まっている。テーマとしてはまさに時代を反映したテーマと言える。ただ、一般の番組では日常的に取り上げられることの多いありふれたテーマではある。

番組の内容については、基本的にテキストに則った内容になっている。その中でテキストから離れられる部分については、基本方針に則したよりよい方向へもっていくという考え方で進めた。今回は、動きのある映像を十分に使えなかったという反省から、できるだけ動きのあるシーン、VTR素材を多用すること、変化のある部分を作ることに努めた。

構成的には、テキストがあり、テキストを持つ受講生が主に視聴するという考え方から離れることができず、その内容に沿った構成になっている。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

大学四国地区国立大学放送公開講座の放送期間中の視聴率は以下の通りである。

第3回 子どもの発達と教育「子どもの発達と祖父母」10月17日（土）午前6：00

平視 均聴 世帯率 (%)	番組占拠率 (%)	終了時視聴率 (%)	個人全体	男全体 〔20才〕	女全体 〔20才〕	職 業 別 視 聴 率					
						事務職	労務職	商工・サービス・自営業	自由管理職	有職者	主家庭婦人
0.5	3.8	1.4	0.1	0.4	*	0.4	0.3	0.5	*	*	*

今回の視聴率調査では、平成2年度に実施した調査に比べ2.1%から0.5%と大幅に落ち込んでしまった。当初の受講申込が四国ではこれまで2番目に多かったと聞かし、また、事前PR、番組内容にしても決して前回は劣ることはないと思われるのである。この番組についても内容的にはそんなに解りにくいこともないし、結構面白い部類に入るのではないかと思う。この理由についてはいろいろ考える事ができるが、一つには前回調査と比べて前後の番組の視聴率、占拠率も半減しておりその現象に引っ張られたのではないかということ。また、職業別視聴率を見ると前回に比べて女性の有職者、主婦・家庭婦人、労務職が激減している。テーマからして最も興味を覚えると思われる層が見ていないということは、前回の時代の最先端を想起させる「生命科学」という言葉のもつインパクトが視聴率に現れたのではないかということ。もう一つは番組が制作者が思うほど面白くなかったということかもしれない。

視聴者の反応としては、大学の講座通信やわが社で依頼したモニターの報告によれば概ね好意的な意見であるが、講師の先生方の口調が堅かった、司会者の存在感が希薄であったなどの批判があった。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

四国地区での制作は国立7大学がローテーションを組んで企画担当し、4県のV4局が持ち回りでその制作を担当している事から、わが社では5年目と7年目に制作が廻ってくる。また2大学あるため各々の大学とは7年に1回の顔合わせということになる。したがって番組を作るという点では、常にスタート時点から戻らなければならない。いつも言われることではあるが番組制作のノウハウが蓄積されにくいという問題がある。

また、少なくとも13回個々のテーマの決定段階で制作者も含めての話し合いができる機会がもてるように、次回ではなんとか努力していきたいと思う。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：四国放送報道制作局第一制作部 岸 佳一

平成2年度の徳島大学医学部に続いて、私がこの番組を担当させていただくのは2度目にな

る。前回は13回を4人で担当し、1人3～4本を制作した。今年度は、1人で制作に当たることにした。その方が制作上の流れも全体的に把握できるし、1本化できてスムーズに事が運ぶのではないかと考えたからである。しかし、いざ制作にとりかかってみると、当初考えていた大学公開講座専従という形はとれず、通常の番組との平行作業にならざるを得なかった。したがって、全てという訳ではないが一部思うように行かなかった番組もある。

また、大学との関係で言えば、講師の先生方は、前回の徳島大学でもそうであったが、どうも忙しすぎて打ち合わせにしろ何にしろ、なかなか調整のできない場合も多かった。ご自分の授業、研究の片手間に公開講座に関わらざるを得ない先生も少なからずいらっしゃるのではないと思う。どうにもならない事かも知れないが、なんとか改善をお願いしたい。私は番組の出来、不出来はある意味で、制作者の方の資源にも大いに関係があるとは思いますが、講師の先生方次第であるとかんがえるから。

前回のテーマ「生命科学」という私たちが胸ときめかせるような、時代の最先端をイメージさせるテーマであったが、いざ制作の段になるとこれがなかなか難解で、映像化が難しい内容であった。今回は、当初映像化することも容易であろうし解り易くみせるということも簡単であろうと思われた。確かに動く映像を取り入れる、変化をもたせるという点では前回より改善できたのではないと思う。解り易さという点では、私たちが考えるそのレベルと先生方のレベルが必ずしも一致したとは言えず、最終的にそれが番組に反映した部分も多々あったのではないと思う。

最後に、視聴率の低さにはいささかショックを覚えたものだが、もう一度後で見返してみると視聴者を飽きさせないという努力が少々足りなかったのではと思える。例えば、全体的に挿入VTRが後半に片寄っているというのも目についた。しかしながら、私としては作ってほんとに良かったと思える番組もたくさんあった。また、打ち合わせ、録画を通して改めて子どもを考える機会をもてたことを、こどもを持つ親として感謝している。子どもと教育を、多角的な視点で統一的に捉えた番組は、ほかにはそんなにないんじゃないかと思う。(ただ、子どもの視点で捉えた内容のものがあまりなかったのが、残念な気もするが。)その意味で、もっとたくさんの人たちにこの番組を13回通して見てもらいたかったという思いでいっぱいである。

制 作 報 告

(1) 制作責任者報告

四国放送ラジオ局制作情報部長 大島 和典

1. 番組制作上の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

従来論じられることの少なかった音楽学、特に音楽社会学の観点から“都市”を考察し各領域が明らかにした「都市像」に新たな側面を加えることを試みるという本講座の精神に添い、前回(平成2年度)制作の経験からも今回も4名のディレクターによるプロジェクトチームを

作りスタートした。2月に大学側と第1回目の打ち合わせを持ったが、鳴門教育大では久保田慶一助教授を中心に、作業が進められ4月末を目途にテキストを完成させるという予定を聞かされ、些か驚かされた。

然し、制作上の問題点などこちらの要望を前回の経験をふまえた説明に、大学側も理解を示し何の問題もなく、スケジュール等が話し合われた。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

企画、構成面は殆ど久保田先生と本田先生にお任せし、表現方法等では随時各ディレクターと相談していくこととなった。

他局でも試みられていたが、インタビュアーや司会者を立てない方がよいとの判断で久保田助教授が各先生方と“対談”という形をとった。

特に「都市と音楽」ということなので、音素材を十分に生かした興味深い収録となった。CDは勿論のことスタジオで、小林蓼子教授のヴァイオリン、村澤由利子教授のピアノ、頃安利秀助教授の声楽などの生演奏を収録したほか、久保田先生が自らウィーン、パリ、ベルリンを訪れて、92年のヨーロッパの空気を肌で感じてのレポートそして大道芸人や教会のミサなどの生音を使用しての講座は効果的であった。(久保田助教授の努力には頭がさがる。)

またラジオは60本以上のスポット及び生放送、そしてテレビスポットもテレビ講座と併せ相当数のPR作戦を展開したことをつけ加えておく。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

現在、スクーリング前なので詳しい状況は把握できないが、番組リスナーからの電話等による反応としては、概ね好評で「音」や「音楽」を効果的に使ってわかりやすい内容との評価を得ている。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

平成2年度の「四国の文学」に続いて2回目であるが、先の教訓が見事に生かされたと自負している。

- つまり ① 早い時期からの組織的打ち合わせ会の開催
② 打ち合わせでの確認事項の確実な実施
③ 大学側の積極的な協力

など大学側のすばらしい「かみ込み」でこれ以上の実施態勢（制作上の）は望めない程のものであった。

今後はこれをどれだけ踏襲、発展できるか又制作側が大学側の熱意溢れる取り組みにどれだけ迫れるかが課題といえよう。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：四国放送ラジオ局制作情報部長代理 尾杉 毅

前は「四国の文学」という比較的身近なテーマであったが、今回はヨーロッパを中心とした都市、そして国内では江戸、東京、大坂（阪）の“音楽”がテーマというスケールの大きさに当初多少の戸惑いがあったが、テキストのゲラ刷りを読むうち、音楽学（音楽社会学）とは案外面白いものだという感想をもつようになった。

例えば博覧場としての都市や身分階層や家族の錯綜したネットワークとしての都市、モノ（商品）としての都市、排泄場としての都市などユニークな？分類には驚かされた。近年のヨーロッパや旧ソ連をめぐる政治、社会的変動そして旧態依然とした東京一極集中の日本などといった状況の中で、中世から現代に至るヨーロッパ及び日本の都市を、音楽の観点から考察するというラジオ講座を担当して、何か忘れかけていた人の心というものを思い出させる「都市と音楽」の13回であった。

Ⅲ. 講座の概要

◎ 科目の概要

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法	放送曜日・時間・期間
子どもの発達と教育 (テレビ)	<p>「1.57ショック」が平成2年の夏、日本中を駆けまわったが、翌平成3年にはついに「1.53ショック」という強震に襲われた。それは厚生省発表の人口動態統計の合計特殊出生率で明らかにされたように、わが国で1人の女性が一生の間に産む子どもの数が、1.53人になったことを意味する。</p> <p>一方、総務庁の発表によると、15歳未満の子ども的人口は、平成4年4月1日現在、約2,164万人であり、これは前年とくらべ約57万人の減少である。</p> <p>このように出生率や出生数の低下は、子どもとは何か、という人間の本質的意義を改めて問い直す必然性をわれわれに提起する。</p> <p>「子どもの発達と教育」は、上記の社会的変動を踏まえ、子どもの成長・発達と教育との相互関連性について歴史、社会、文化等のさまざまな視点から多角的にアプローチする。これにより本企画は、子ども像の体系的把握を目指すと同時に、受講生に実践的な子ども</p>	<p>近年、人間諸科学の発達新しい研究パラダイムの活用により、人間とは何か、という人間存在の根源的問題の構造的把握へ向かって、その深化と拡充の度合が次第に加速化されている。なかでも人間発達の初期段階に関する諸研究は、顕著な学成果を産み出し、これらが従来の子ども像の変容に大きく影響している、といっても過言ではない。</p> <p>ところで今日の子どもの取りまく歴史的、社会的、文化的、教育的諸環境は、子どもの健全な発達を保障するためにどのような役割と機能をもつのか、についての科学的考察がいま改めて考究されなければならない。したがって子どもの発達保障へ向けた科学的知見の日常的、生活的側面への適用と充実のための試行が、現代の社会的、教育的課題として浮上してくる。</p> <p>このために「子どもの発達と教育」は、子どもに関わる諸問題を大局的見地と微視的見地の両側面から相互補完的に機能させ、子ども</p>	<p>子どもの生態システムは、四つの空間としての環境カテゴリー、すなわちミクロ生態システム(microecosystem)、ミニ生態システム(miniecosystem)、メゾ生態システム(mesoecosystem)、マクロ生態システム(macroeosystem)に分類される。これらの環境カテゴリーのなかで、人的環境としての発達のエージェントである親、祖父母、教師、友人等の社会的、教育的行為が、子どもの側にどのような歴史的、文化的、人類的遺産を獲得させるのか、さらには生活実体としての人間的資質がどのように形成され、発達していくのか、について以下の三分野を中心に内容の構成を行った。(図1を参照)。</p> <p>第1の構成分野は、ミクロとミニの生態システムに関連する中心的諸課題の解説と展望を行う。第1回は母性とは何か、子どもの発達におよぼす母性の役割について考察する。</p> <p>第2回は父性とは何か、子どもの発達におよぼす父性の役割について考察する。第3回</p>	<p>四国放送 (徳島県) 毎週土曜日 午前6:00~ 午前6:45 平成4年 10月3日~ 12月26日</p>
				<p>西日本放送 (香川県) 毎週日曜日 午前6:00~ 午前6:45 平成4年 10月4日~ 12月27日</p>
				<p>南海放送 (愛媛県) 毎週土曜日 午前6:00~ 午前6:45 平成4年 10月3日~ 12月26日</p>
				<p>高知放送 (高知県) 毎週土曜日 午前5:45~ 午前6:30 平成4年 10月3日~ 12月26日</p>

理解の科学的知見を提供する。

もとは何か、という人間存立の基礎を考察し、同時に子どもが発達するとはどのような事実や事象をいうのか、子どもの全体像の内実を明らかにするために企図されたものである。

は子どもと祖父母の関係と祖父母の役割について考察する。第4回は子どもの身体発達と運動機能との関連について考察する。第5回は身体疾患の予防と健康の増進の方法について考察する。

第2の構成分野は、メゾ生態システムに関連する中心的諸課題の解説と展望を行う。第6回は教師とは何か、子どもと教師との関連について考察する。第7回は児童文学が子どものしなやかな感性をどのように培うかについて考察する。第8回は精神的疾患を防止し、精神の健康を増進させる方法について考察する。第9回は障害を負う子どもの発達保障の教育について考察する。

第3の構成分野は、マクロ生態システムに関連する中心的諸課題の解説と展望を行う。第10回は子どもの生活と歴史を通して、子どもとは何かについて考察する。第11回は現代の情報化は子どもの文化や発達とどう関わるのかについて考察する。第12回は子どもの人権とは何か、児童福祉のあるべき姿について考察する。第13回は社会の国際化の進展のなかで、子どもの発達と教育はどうあるべきかについて考察する。

			<p>「子どもの発達と教育」の各回の放映には、複数の講師が共同制作した映像がコンパクトにまとめられており、受講生が視聴しやすい種々の工夫が試みられている。たとえば図、表、写真、フリップ、その他の趣向をこらした映像が適切に活用されるなかで、受講生の子ども把握と子ども理解とが、従来にも増して深まるであろう。</p> <p>なお、各回の放映は、テキストの内容を基盤に映像化したものであるが、テレビというメディアの特性を十二分に応用することにより、受講生の子どもに関する知見の獲得に貢献すると思われる。</p>	
都市と音楽 (ラジオ)	<p>近年《都市論》がブームだ。歴史学、社会学、建築史、さらに文化史といった諸々の領域において、《都市》という実体あるいは現象が研究の対象となり、様々な観点からの《都市論》が展開されている。本講座では従来論じられることの少なかった、音楽学、特に音楽社会学の観点からこの《都市》を考察し、各領域が明らかにした《都市像》に新たな側面を加えることを試みとしている。</p>	<p>今日の《都市論》が明らかにした《都市》の姿とは、種々の実体と種々の機能とが有機的に結合した《複合体》という都市の姿であった。例えば、「博覧会場としての都市」、「排泄場としての都市」、「身分階層や家族の錯綜したネットワークとしての都市」、「モノが集合した場所としての都市」、「ストックとしての都市」、「消費・流行としての都市」など。</p> <p>このように様々な姿を見せる《都市》にあつて、音・音楽も様々</p>	<p>本講座において対象とする都市は、パリ、ウィーン、ベルリン、東京、大阪の5都市である。前3都市については、各都市に3回の放送日程をあて、後2都市については、各都市に1回の放送とする。さらに初回と最終回の放送では、基礎的ならびに総括的内容を講義する。</p> <p>実際の放送では、各回30分の放送時間のうち、約10分間を音楽の鑑賞にあて、テキストの内容に準拠しつつも、聴いて楽しめる番組作りをめざす。また全13</p>	<p>四国放送 (徳島県) 毎週日曜日 午前6:30~ 午前7:00 平成4年 10月4日~ 12月27日</p> <p>西日本放送 (香川県) 毎週土曜日 午前6:30~ 午前7:00 平成4年 10月10日~ 平成5年 1月2日</p> <p>南海放送</p>

		<p>な形となって現れ、また様々に機能する。都市を「象徴」する音・音楽が集積し多層的に響く都市、また種々の音楽を奏で、聴く様々な人間が集まる都市、レコード、CD、楽譜が氾濫する都市、コンサート・ホールや音楽学校が集中する都市、一流音楽家が人々の注目を集め、街頭では辻音楽師が庶民の歌を聴かせる都市、時に音楽家に熱狂し、時に無視を決め込む都市の気紛れな聴衆等々。</p> <p>本講座では、このような都市と音楽が描く様々な絵模様を、ヨーロッパや日本の代表的な《首都的都市》を例に、歴史的な展望をもとに叙述していく。</p>	<p>回の放送のうち、3回分については音楽教育講座の教官による演奏を放送する。</p> <p>以下にテキストの章構成を示し、本講座の内容の概略とする。各1章が1回の放送分に該当する。()内は担当講師名。</p> <p>第1章：都市と音楽</p> <p>1) 都市とは</p> <p>2) 都市と音楽 (本田皜・久保田慶一)</p> <p>第2章：祝祭都市パリの音楽</p> <p>1) 中世都市・パリの音楽</p> <p>2) ヴェルサイユの音楽</p> <p>3) 18世紀のパリの音楽 (村澤由利子・久保田慶一)</p> <p>第3章：近代都市パリの音楽</p> <p>1) フランス革命と音楽</p> <p>2) ブルジョアジーの台頭</p> <p>3) 第2帝政時代のパリ (村澤由利子・久保田慶一)</p> <p>第4章：未来都市パリ 世紀末から現代へ</p> <p>1) ベル・エポック</p> <p>2) パリの世紀末</p> <p>3) 未来都市パリ (村澤由利子・久保田慶一)</p> <p>第5章：ハプスブルクの音楽都市ウィーン</p>	<p>(愛媛県)</p> <p>毎週日曜日 午前9:00～ 午前9:30 平成4年 10月11日～ 平成5年 1月10日 但し、平成5年1月3日を除く</p> <hr/> <p>高知放送 (高知県)</p> <p>毎週日曜日 午前8:30～ 午前9:00 平成4年 10月4日～ 12月27日</p>
--	--	--	---	--

- | | |
|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> 1) ハプスブルクの祝祭都市 2) ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト 3) ハイドンとベートーヴェン |
| | (小林茉莉・久保田慶一) |
| | 第6章：音楽の都ウィーン |
| | <ul style="list-style-type: none"> 1) 3月革命前のウィーン 2) 音楽の都ウィーン 3) ウィンナ・ワルツの世界 |
| | (小林茉莉・久保田慶一) |
| | 第7章：ふたつの世紀末 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 1) ウィーンの世紀末 2) ウィーンのユダヤ主義 3) 《中欧》の中核都市として |
| | (小林茉莉・久保田慶一) |
| | 第8章：ベルリン サン・スーシーの夕べ |
| | <ul style="list-style-type: none"> 1) 王都ベルリン 2) サン・スーシーの夕べ 3) ベルリン・オペラ |
| | (頃安利秀・久保田慶一) |
| | 第9章：ドイツ・ロマン主義の都 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 1) ドイツ国民主義とロマン主義 2) 真にドイツ的なものを求めて |

		<p>3) 第2帝国の首都として (頃安利秀・久保田慶一)</p> <p>第10章：ワイマールの光と影</p> <p>1) ワイマールの光 2) ワイマールの影 3) 統一ドイツの首都として (頃安利秀・久保田慶一)</p> <p>第11章：大坂・大阪の音と音楽</p> <p>1) 上方の音楽 2) 経済都市大阪の文化戦略 (本田皞・久保田慶一)</p> <p>第12章：江戸・東京の音と音楽</p> <p>1) 江戸の町人文化 2) メガロポリス東京 (本田皞・久保田慶一)</p> <p>第13章：都市・人・音</p> <p>1) 現代都市における音楽 2) 現代都市の新・音楽 3) 都市・人・音 (本田皞・久保田慶一)</p>	
--	--	--	--

◎ 科目の構成

(テレビ科目) 子どもの発達と教育

放 送 回 (月 日)					中心テーマ	内 容	担当講師等
回	四国放送 (徳島県)	西日本放送 (香川県)	南海放送 (愛媛県)	高知放送 (高知県)			
第 1 回	10月3日	10月4日	10月3日	10月3日	子どもの発達 と母性	<p>“母性”とは何か。この概念の意味するものは極めて曖昧である。通常、女性の生得的・生理的な、子どもを産み育てる資質として理解される。しかし今日、母と子という準拠系から脱却した新しい母性観が要請されている。それは従来の母子関係から母子相互作用、さらに父母子相互作用に力点を置きながら、社会的ネットワークの中で母と子の問題を追求する研究である。この試みが母性の内実の把握に連なる。一方、子どもの成長・発達にとって母親の行動的モデルは、重要な要因である。</p> <p>では伝統的な母性の強調は、とりわけ核家族や社会から孤立している母親に何をもたらしたか。育児不安、育児ノイローゼ、児童虐待等の病理現象は、母性の裏面と同時に母性神話の虚構性を暴露したものに他ならない。子どもの成長と自立へ向けた対象愛である母性愛は、母親自身の自己確立を前提とする。それ故、ここでは新しい母性の形成と子どもの発達との関連について、具体的に解説する。</p>	鳴門教育大学 教授 佐々木 保 行
						「子どもの発達に忘れられた貢献者」といわれる父親に関する研究も、近年、めざましい成長を遂げている。	

第 2 回	10月10日	10月11日	10月10日	10月10日	子どもの発達 と父性	<p>しかし母親の研究とくらべ圧倒的に少ない現状であるが、父子関係を両者の相互作用の視点、さらに父母子の三者間相互作用というアプローチを用いることによって、父親の役割と機能が次第に解明されている。</p> <p>これまで父性を力の象徴、威厳、権威といった表現による対象化から子どもにとって存在感のある父親像を創り出すことが、新しい父性を生む。この新しい父性は、人間生活のなかで最も豊かな部分である子育ての過程で培われる。それ故、日本の父親の家庭生活の実態を明らかにし、問題行動を起こす子どもの背景に父親の関与の要因があることを、具体的な臨床例をもとに展開する。</p> <p>父性とは学習と体験から獲得される父親の人間的資質である。親準備性として必要な学習、配慮とは何か、を例示し、解説する。</p>	鳴門教育大学 教授 佐々木 保 行 鳴門教育大学 助教授 山 下 一 夫
第 3 回	10月17日	10月18日	10月17日	10月17日	子どもの発達 と祖父母	<p>子どもたちにとって身近な存在としての祖父母や老人が登場する昔話の例からこの番組は始まる。そして、現代の家庭においては老人の役割が大きく変化し、理念的にも実質的にも夫婦単位の核家族が中心となってきた状況を解説する。一方、四国地方には三世同居世帯が多いのだが、そうした大家族の中で、祖父母の存在が子どもの心身の発達にマイナス効果を及ぼしているケースもみられる。精神科医のカルテから心の病を</p>	鳴門教育大学 教授 湯 川 聰 子 鳴門教育大学 教授 田 中 雄 三

						<p>患った子どもの2例について、その病歴と治療経過を説明する。</p> <p>老若世代が互いに自然の愛情をはぐくんで接触を保ち、相互扶助を続けることが理想であるが、なかなかの難問である。それには両世代が空間的に少し離れることが解決になることが多い。すなわち、同じ屋根の下に「同じ釜のめし」を食べる昔型の同居ではなく、「スープのさめない距離」を保つことである。こうした方針による最近の3世代住宅の図面を提示・解説して結びとする。</p>	
第4回	10月24日	10月25日	10月24日	10月24日	子どもの身体と運動機能	<p>「放っておいても、子どもは育つ。少しぐらい運動不足でも、あとで取り返せばいい。それより、いい学校に入ることの方が大事。」</p> <p>たくさんの親たちは、いや大切な子どもを預かる教師の中にもこんな考えの人がいるに違いない。これは大変な間違いである。育ち盛りの運動不足をあとで取り返すことは、まず出来ない。</p> <p>それは、子どもの身体や機能の発達には、一定の順序と時期があるからである。</p> <p>また最近の子どもは野外での遊びが少なくなった。その結果次第に野生的能力を喪失しているととわれる。木登りがなくなり「高所平気症」の子どもが増加、浅いプールでしか水泳経験がないために、産みや川での生きた水では泳げない子どもも増加している。</p>	鳴門教育大学 教授 杉原潤之輔 鳴門教育大学 教授 山本貞美

						<p>このように困った問題が多くなっている。この回では、それらに対してどのような対処すれば良いかについて、実際の子どもの姿（映像）や実験に基づき検討する。</p>	
第5回	10月31日	11月1日	10月31日	10月31日	子どもの健康と病気の予防	<p>先進国型の社会構造になってきた今日のわが国では、ヒトの生涯にわたる健康と小児期に始まるライフスタイルとの関わりが、子どもの成人病という形で問題となってきた。</p> <p>子どもの成人病とは動脈硬化を中心としており、小児期のライフスタイルの改善などにより予防する成人病をいう。その内容としては以下の3グループがあげられよう。</p> <p>1)成人病がすでに小児期に顕在化しているもの（糖尿病、虚血性心疾患、消化器潰瘍など）。</p> <p>2)潜在している成人病（動脈硬化の初期病変が10歳代の子どもの多数にみられる）。</p> <p>3)成人病の危険因子がすでに小児期にみられるもの（肥満、高脂血症、高血圧症など）。</p> <p>子どもの成人病には高脂血症や高血圧に代表されるような遺伝的側面もあるが、むしろ環境との相互作用による健康障害や疾病として発現する多因性の方が主体と考えられる。危険因子は成人と同様、複雑多岐にわたるが、大部分は食事、運動不足および肥満に集約される。したがって健康教育の必要性を痛感する。</p>	<p>鳴門教育大学 教授 山下 喬</p> <p>鳴門教育大学 助教授 井上 和臣</p>

第 6 回	11月7日	11月8日	11月7日	11月7日	子どもの発達 と教師	<p>子どもの発達におよぼす教師の役割について考える。ここでは、教師の役割を、授業と学級経営という2つの主要な教育的営みの中でみていく。</p> <p>まで、授業とのかかわりの中で、(1)学校学習のしくみ、(2)国際的にみた日本の子どもの学力の特徴、(3)2つの主要な教育目標（「基礎学力の充実」と「個性の伸長」）といった内容を扱う。特に、「個性の伸長」をめざす授業の具体例として、小学校低学年の生活科の授業と中学校の選択学習の授業を紹介する。</p> <p>次に学級経営の教育的な機能に焦点をあてて、(4)教師期待効果、(5)教師による子どもの行動特性の認知、(6)学級経営と学習効率などの内容を取りあげる。特に、教師と子どもとの相互作用や子ども同士の相互作用を通して、子どもがどのように社会性を形成していくのかを論じる。</p>	鳴門教育大学 助教授 吉 崎 静 夫 鳴門教育大学 助教授 佐 古 秀 一
第 7 回	11月14日	11月15日	11月14日	11月14日	子どもの感性 と児童文学	<p>まず、文学が育む感性とは何かについて具体的に子ども達とのかかわりのなかで概論的に展開する。とくに、映像メディアとのかかわりで、言葉（文学）が生み出す象徴性と子どもの感性について重点的に述べてみる。</p> <p>今回の放送においては、3つのアプローチをとる。</p> <p>第1は、鳴門教育大学における児童図書室での実践活動を通して、利用者である子ども、大学生が、単な</p>	鳴門教育大学 教授 田 辺 健 二 鳴門教育大学 教授 佐々木 宏 子

						<p>る教科教育ではカバーできない人間性理解について児童文学から何を学んでいるのか。</p> <p>第2は、学校の国語教諭および児童文学作家が、児童文学と感性についてどのように考えているのかを具体的にさぐる。</p> <p>第3は、前記のアプローチを通して得られたデータをもとに、二人の講師による、具体的作品を取り上げての対談で締めくりたい。</p>	
第8回	11月21日	11月22日	11月21日	11月21日	<p>子どもの心の病理と精神的健康</p>	<p>子どもの心・精神の病理（問題行動や病的な状態に至った種々のメカニズム）とか、健康状態については、子どもの身体の状態と同様に、世間一般の子を持つ親の最も配慮しているものの一つと言える。しかし、いったん、自分の子どもの心・精神状態が病的あるいは異常な状態になると親の心性が動揺し当惑するのが通常である。従って、如何にして子どもの心・精神の病的あるいは異常な状態に成ったかの機構とか、どうすれば、精神的に健康な状態に回復するだろうか…と種々苦悩する筈である。</p> <p>故に、子どもの心・精神状態が、たとえば「問題行動」「言語遅滞」「不登校」「家庭内乱暴」「いじめ」「非行」「神経症的発症」「小児精神病」等々のような状況になった場合に、その要因とか契機などについて考え苦悩する。しかも子どもの心・精神の健康状態をどのように維持増進させていくべ</p>	<p>鳴門教育大学 教授 今 津 博 市</p> <p>大阪市立大学 教授 倉 戸 ヨシヤ</p>

						<p>きかということのを改めて認識し始めるであろう。</p> <p>これら子どもの心性に内包されている諸問題のうち、若干の問題について、小児精神科医と臨床心理家の立場から、可能な限り平易に紹介する予定である。</p>	
第9回	11月28日	11月29日	11月28日	11月28日	子どもの発達障害と教育	<p>昭和54年度より、障害をもつ子どものための教育（障害児教育）にも義務制が施行され、一応制度的に整備されたが、現実には、こうした子ども達がどのような教育を受けているのかについて、あまり知られていないのが現状である。</p> <p>そこで、まず、「障害」ということばの意味と種々の障害の定義を知ることから始め、こうした子ども達の通学する学校の種別、学校数、在籍数等の統計資料を提出する。続いて、乳幼児期に行われる発達診断による障害像・発達像を具体的に把握する方法及び家庭での教育の実態についてみていく。さらに、こうした子ども達のため学校教育が、どのようなシステムで行われているか、教育カリキュラムがどのように組まれているか等について検討し、現状の問題点と今後の課題についても触れる。</p>	<p>鳴門教育大学 助教授 田 中 道 治</p> <p>鳴門教育大学 助教授 安 好 博 光</p>
						<p>昔、子どもは「小型の大人」として大人と区別された存在ではなく、大人になるための前段階と考えられていた。しかし今日では、子どもは、大人と異なって子どもとしての認識や思考</p>	

第 10 回	12月5日	12月6日	12月5日	12月5日	子どもの生活 と歴史	<p>などを有しており、したがって行動も大人と異なっているのが当然であると考えられている。</p> <p>このように大人と異なった存在としての子どもが発見されたのは、思想的にはいつごろからであったかなど、子どもの発見についてルソーやアリエス等を中心にして考える。そしてこのような子どもの発見が、実際の生活のなかでどのようなかたちとなって表れてくるのかについて、近代日本を例にとり、子どもの遊びや、食べものや生活環境の悪化を考える。そしてこのような変化が、子どもの意識にどのように影響を与えたか、さらには親や教師の子どもに対する態度にどのような変化をもたらしたかについて、出来るだけ、絵、写真などの資料を中心にして解説する。</p>	鳴門教育大学 教授 田 甫 桂 三
第 11 回	12月12日	12月13日	12月12日	12月12日	子どもの文化 と情報化	<p>「子ども文化」とは、「子どもたちによってつくられ、子どもたちの間で分有され伝達される行動様式（生活様式）」である。それは、一定の社会の中で、下位文化（サブ・カルチャー）として成り立っているもので、特におとなの文化との関係によって、そのありようが異なってくる。また今日のような学校化された社会では、学校文化と子ども文化との関係が問題となる。</p> <p>こうした「子ども文化」は、現代の情報化社会の進展の中で、激しく変容しつつある。ファミコン文化を象徴とするメディア文化の</p>	<p>広島大学 教授 原 田 彰</p> <p>鳴門教育大学 助教授 伴 恒 信</p>

						影響、それがもたらす仲間集団、遊び文化、更に広くは勉強（受験）文化、非行文化など、特に、実体験・実経験の欠けた仮想－現実世界（Virtual Reality）文化に焦点をあてて、情報化が「子ども文化」に与える影響を見つめるとともに、これからの子どもの文化のあり方を考える。	
第 12 回	12月19日	12月20日	12月19日	12月19日	子どもの権利 と福祉	<p>「子どもは権利主体である」との主張に、違和感を抱く人が少なくない。未熟で、無知な子どもには、おとなの保護や管理・教育が必要で、子どもにそれを与えるのが、おとなのつとめであると考えられている。</p> <p>“子どもをどうとらえるか”は、「子どもの権利条約」批准を前にして、おとなに課せられた厳しい問いである。子ども観の歴史をふり返り、身近な家庭・学校における子どもの現実をふまえて、「子どもの権利」について考える。</p> <p>福祉についても、すべての子どもの人権が尊重され、かれらを幸福に育成することが基本になる。現在の福祉は、心身に障害のある子どもや家庭的、経済的に恵まれない子どもだけでなく、すべての子どもに人間としての生活を保障する立場をとる。特に、今日の家庭や社会の著しい環境の変化が、育成上、さまざまな問題を生じている。こうした私たちの身近な問題点をとらえることによって、今日の新しい児童福祉のあるべき姿を考える。</p>	鳴門教育大学 教授 涇 口 俊 鳴門教育大学 教授 一 宮 俊 一

第 13 回	12月26日	12月27日	12月26日	12月26日	子どもの発達 と国際化	<p>国際化とは、私たちひとりひとりが自己及び国家を国際社会のなかにどう位置づけるかの問題である。日本の国際化を考えると、私たち日本人の精神構造は、慣習社会のなかで閉ざされていることが多いのに気づく。そうした自覚のもとに、保護者・指導者自身が、「国際化」の本質に即して自己を拓いていくとともに、国際化の主体である子どもに視点をおいた社会環境及び教育が考えられねばならない。子どもを国際人として育てていく環境として、国際親善の行事や異文化理解の教育はもとより大切であるが、単発的な行事や、受身の知識だけでは不十分である。国際性を身につけさせるためには、国際化への関心をもち続けさせ、意欲・態度を習慣化していく環境・教育が必要であることを具体的に述べたい。</p>	<p>鳴門教育大学 教授 橋 本 暢 夫</p> <p>鳴門教育大学 教授 浅 野 弘 嗣</p>
						<p>なお、放送終了に当たり、「子どもの発達と教育」についての総括を主任講師から行う。</p>	<p>鳴門教育大学 教授 佐々木 保 行</p>

(ラジオ科目) 都市と音楽

放 送 回 (月 日)					中心テーマ	内 容	担当講師等
回	四国放送 (徳島県)	西日本放送 (香川県)	南海放送 (愛媛県)	高知放送 (高知県)			
						<p>《都市》と言っても、その言葉が意味するところは多様であり、各研究領域によって異なる。このことはこの《都市》という存在が、</p>	

第 1 回	10月4日	10月10日	10月11日	10月4日	都市と音楽	<p>実に様々な実体と機能を有した《複合体》であることを示している。初回では、まず《複合体》としての都市の多彩な諸側面を描く。</p> <p>このような《都市》において、音や音楽は様々な姿となって現われ、また様々な機能を有する。ここでは、都市においてのみ形成される聴衆と、都市で活躍する音楽家にスポットを当てる。また音や音楽が特定の都市や特定の時代に《機能》したことは、それらがまたその土地や時代を映し出す鏡であることを意味している。このような意味での音・音楽の“象徴”的機能も明らかにされる。</p>	鳴門教育大学 教授 本 田 皐 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一
第 2 回	10月11日	10月17日	10月18日	10月11日	祝祭都市パリの音楽	<p>中世都市パリの成立を概観し、その都市の主たる構成要素となった教会、大学における音楽を考える。特にノートル・ダム寺院では、後のヨーロッパ音楽の発展を決定したポリフォニー（多声音楽）が誕生した。</p> <p>続いては17～18世紀のパリ。特にヴェルサイユ宮殿での音楽活動を紹介する。ルイ14世の時代には、オペラ、バレエ、管弦楽、さらにはクラヴサン音楽など、実に華やかなロココ趣味の音楽文化が開花した。このような音楽がまたヨーロッパの他の宮廷でも模倣された。</p> <p>しかし18世紀のパリには、このような貴族文化の他に、啓蒙主義思想の影響下に、ブルジュア階級の音楽が生まれ、近代的な音楽都市と</p>	鳴門教育大学 教授 村 澤 由利子 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一

						<p>してのパリが成長しつつあった。ドイツからも多くの音楽家が集まり、今日の演奏会制度の基礎となる《公開演奏会》がすでに定着していた。</p>	
第 3 回	10月18日	10月24日	10月25日	10月18日	近代都市パリの音楽	<p>フランス革命は近年その《祝祭性》が強調され、音楽面では現在のフランス国歌にもなっている『ラ・マルセイエーズ』が、革命の進展に貴重な役割を果たした。またヨーロッパの他の人々には、この旋律は旧体制・アンシャン・レジームに対抗する民衆の叫びに聞こえた。ここではこの旋律を通して、革命期ならびにその後のヨーロッパ音楽を眺めてみることにする。</p> <p>1848年の《2月革命》以前のパリでは、とりわけブルジョア階級の台頭がめざましい。そしてこれを背景として、リストやショパンといった名演奏家が活躍する。芸術家の自由で輝く存在は、新興階級の人々には自分達の社会的進出を表わすかのように思えたにちがいない。だがワーグナーのようにパリの聴衆に泣かされる音楽家もいた。</p> <p>第2帝政期のパリは、オスマンによる都市改造、万国博覧会と、その今日の姿を整えていく。人々もこの《高度成長》にバラ色の未来を見、ドイツからやって来た作曲家オッフェンバックのオペレッタに現をぬかした。</p>	<p>鳴門教育大学 教授 村 澤 由利子</p> <p>鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一</p>

第 4 回	10月25日	10月31日	11月1日	10月25日	未来都市パリ 世紀末から現代へ	<p>普仏戦争では苦杯を嘗めたものの、第3共和制の Париは、世紀末文化の熟練した甘味な世界を満喫する。カフェではシャンソンが美しきパリを謳い、コンサート・ホールではドビュッシーの音楽がモネの絵画を彷彿とさせた。</p> <p>ヨーロッパ列強の帝国主義は、やがて第1次世界大戦に至る。その前夜の Париでは、人類が初めて体験するこの大量殺りく戦争を予期するかのように、ディアギレフとストラヴィンスキーのロシアからの外来者が、旧き良きパリの音楽の伝統を大いに揺さぶった。</p> <p>第2次世界大戦後の Париは、いち早く音楽の中心地となった。特にメシアン、ブレーズといった現代を代表する作曲家が、新しい音楽創造を開始した。また近年ではポンピドゥー・センターの一角にあるイルカム IRCAM（音響音楽調整研究所）が、世界の現代音楽をリードしている。</p>	鳴門教育大学 教授 村 澤 由利子 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一
第 5 回	11月1日	11月7日	11月8日	11月1日	ハプスブルクの音楽都市ウィーン	<p>16世紀までの都市史を概観した後、特に17世紀から18世紀にかけてのウィーン・バロック時代の音楽を説明する。イタリア・オペラが盛んに上演されたほか、ハプスブルク家の皇帝たちも音楽をたしなむなど、ウィーンは祝祭都市として栄えた。</p> <p>しかしモーツァルト、さらにハイドン、ベートーヴェンといった、ウィーン古典派音楽の三巨匠が活躍す</p>	鳴門教育大学 教授 小 林 孝 子 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一

						<p>る頃には、すでにハプスブルク帝国はかつての威容を失い、1806年には神聖ローマ帝国の皇帝の座もナポレオンに奪われてしまう。これら三巨匠のウィーンでの活動には、落日の光に照らされたオーストリア・ハプスブルクの帝都ウィーンが様々な影を落としている。モーツァルトの“死”、ハイドンの“成功”、ベートーヴェンの晩年の“苦悩”などに、都市社会学の観点からの考察が試みられよう。</p>	
第 6 回	11月8日	11月14日	11月15日	11月8日	音楽の都ウィーン	<p>ナポレオン戦争後のヨーロッパの政治地図を決定した《ウィーン体制》は、保守・反動政治を生み出した。特にメッテルニヒの傘下のウィーンでは検閲制度も厳しく、音楽をはじめ文化活動は著しく停滞した。また人々は小市民的な趣向を求めた。検閲に悩みウィーンの市民に愛されたシューベルトを中心に、この《ビーダーマイアー》時代の音楽が論じられる。</p> <p>しかし19世紀後半のウィーンは、都市大改造の後、近代都市として発達した。音楽家は新しく建造された宮廷歌劇場や楽友協会ホールで、今日で言う《クラシック音楽》の名曲の数々を披露した。他方ウィーンではこのような芸術音楽の他に、ウィンナ・ワルツやオペレッタと言った軽音楽が盛んに演奏され聴かれた。</p> <p>《音楽の都》としてのウィーンの姿を、近代都市として生まれ変わった《新生ウィーン》に求める。</p>	<p>鳴門教育大学 教授 小 林 夢 子</p> <p>鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一</p>

第 7 回	11月15日	11月21日	11月22日	11月15日	ふたつの世紀 末	<p>ウィーンの世紀末文化は、パリの場合に比べて、ペシミステックな側面を見せる。ウィーンの世紀末文化が1919年のハプスブルク家の崩壊を前にしたウィーンの最後の輝きであり、またそれが、ウィーンの同化ユダヤ知識人の活動によるところが大きかったためでもあった。帝国の衰退に危機を抱く人々は、その不安を反・ユダヤ主義の中に解消させようとした。シェーンベルクそしてマーラーという二人の音楽家も、ウィーンの世紀末文化の輝きに照らされ、そこに自らの音楽を響かせたが、反・ユダヤ主義の嵐はこれら《異邦人》をウィーンから去らしめた。共にウィーンに愛憎の気持ちを抱き、ウィーンを後にしたのであった。</p> <p>第2次世界大戦中のウィーンはナチス第3帝国の一都市となったが、戦後、特に最近の東西冷戦構造の解体によって、ウィーン、ベルリンを含む《中欧》は、再びかつての栄光を取り戻すべく模索している。</p>	鳴門教育大学 教授 小 林 夢 子 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一
						<p>ベルリンの都市としての歴史は、パリやウィーンに比べて短い。そのために都市の性格も特異である。特にその国際的性格とプロイセン気質がその都市文化を決定した。ベルリンが最初に都市文化の開花を経験するのは、18世紀の後半、フリードリヒ2世（フリードリヒ大王）の治世の時代であった。</p>	

第 8 回	11月22日	11月28日	11月29日	11月22日	ベルリン サン・スーシの 夕べ	<p>王はポツダムにサン・スーシー宮殿を建て、演奏会では王自らもフルートを奏した。宮廷楽団の面々も当時ドイツの一流の音楽家ぞろいであった。当時の旅行記をもとに当時の演奏会の様子をさ再現してみる。</p> <p>またベルリンの町には歌劇場が建設され、7年戦争までの十数年間、ベルリン・オペラは最初の全盛期を迎える。グラウンやハッセのイタリア趣味の音楽が専ら演奏されたが、ベルリンの国際的性格は、ドイツ民族主義の興隆を促し、ベルリンのもう一つの特徴となったプロイセン気質を顕著にした。</p>	鳴門教育大学 助教授 頃 安 利 秀 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一
第 9 回	11月29日	12月 5 日	12月 6 日	11月29日	ドイツ・ロマン主義の都	<p>ナポレオンによるベルリン占領、さらにナポレオン解放戦争は、プロイセンの国民主義を大いに鼓舞した。プロイセン改革が断行され、ベルリンには大学が創設され、真のドイツ文化の創造が叫ばれた。しかし現実にはドイツは数十の小国歌の分裂状態にあり、人々はメッテルニヒ体制の旧国歌にその現実の代償を見、その挫折感をロマン主義思潮の中に解消せんとした。</p> <p>音楽の分野では、ウェーバーがオペラ『魔弾の射手』をベルリンで成功させ、ドイツ・ロマン派・オペラの端を切った。またユダヤ人哲学者モーゼス・メンデルスゾーンの子孫、ベルリンの大銀行家アブラハムの子である音楽家メンデルスゾーンが、バッハの忘れ去ら</p>	鳴門教育大学 教授 頃 安 利 秀 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一

						<p>れた名曲『マタイ受難曲』の復活上演を成功させ、バッハ・ルネサンスの開始となった。</p> <p>1871年ビスマルクによってドイツ統一は達成され、《新生ベルリン・フィルハーモニー》が高らかにその成立を祝った。</p>	
第10回	12月6日	12月12日	12月13日	12月6日	ワイマールの光と影	<p>ドイツ帝国を初め、イギリス、フランスのヨーロッパ列強の覇権争いは第1次世界大戦に至った。大戦後ドイツはヴェルサイユ条約に窮しながらも、ワイマール共和国を成立させた。</p> <p>1920年代ベルリンには、ワイマール文化と呼ばれる都市文化が開花し、音楽ではウィーンからやってきたシェーンベルク、指揮のフルトヴェングラー、またブレヒトと協力したワイルが、都市大衆のための音楽文化を創作した。</p> <p>しかし1932年ヒトラーが政権を取るや、ワイマール文化は一転してファシズムの闇に覆われた。シェーンベルク、ヴァルターを初めユダヤ人音楽家が亡命し、フルトヴェングラー、カラヤンはナチス政権に協力するかのようドイツ各地で活動した。</p> <p>1990年東西ドイツは統一され、翌年ベルリンは統一ドイツの首都に。多くの難問を抱えつつも、今や新しいタイプの都市文化が生まれつつある。</p>	<p>鳴門教育大学 助教授 頃 安 利 秀</p> <p>鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一</p>
						<p>室町時代から安土・桃山時代にかけて、大坂（堺を</p>	

第 11 回	12月13日	12月19日	12月20日	12月13日	大坂・大阪の 音と音楽	<p>含む)、京都の各地に独自の都市文化が育まれた。特に音楽面では、京都での能楽の隆盛、堺での三味線の移入による町人の音楽活動の活性化が挙げられる。さらに、江戸時代には三味線音楽の隆盛にともない、人形浄瑠璃の義太夫節、地歌など、上方特有の音楽が生まれた。</p> <p>江戸が首都的都市であったのに対して、大坂は経済的都市であり、東京とは異なる都市文化を育成してきた。特に1970年の大阪万国博覧会の開催は、国際都市としての大阪の成長を促した。この博覧会では現代音楽の発展に寄与したイベントも行われた。また近年では、本格的なオーケストラ用ホールが次々と建造され、東京と並ぶ消費都市ぶりを見せている。しかし、このような状況の中で、かつて元禄時代に花開かせたユニークな都市文化が生まれるかどうか、大いに興味あるところである。</p>	鳴門教育大学 教授 本 田 皥 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一
第 12 回	12月20日	12月26日	12月27日	12月20日	江戸・東京の 音と音楽	<p>関東地方の城郭都市のひとつとして生まれた江戸の町は、国家の首都として大いに繁栄し、豊かにして多彩な都市文化が、発達した。江戸の町の音楽文化の源は歌舞伎で、広く庶民の生活にも浸透していた。</p> <p>しかしこの都市文化も、幕末を迎え明治時代が始まるに及んで、大きな断絶を経験する。それは明治政府によって積極的に推進された西洋文化の導入のため</p>	鳴門教育大学 教授 本 田 皥 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一

						<p>あった。音楽の分野でも従来の音楽（いわゆる邦楽）は衰退し、洋楽が音楽教育の基本とされ、人々は洋楽をたしなむことを近代化の証と考えた。大正時代には、大正デモクラシーと称される都市大衆化の中で、生き生きとした都市大衆の文化が花開いた。</p> <p>第2次世界大戦後の発達は著しい。今日東京は、国際化された都市文化の発信地としても機能している。十数個のオーケストラが存在し、世界中のアーティストの演奏を聴ける文化の大消費地でもある。だがここに創造的な音楽都市文化が生まれつつあるのだろうか？</p>	
第13回	12月27日	1月2日	1月10日	12月27日	都市・人・音	<p>本講座で考察の対象としてきたヨーロッパの諸都市は今日では特殊な存在であり、むしろ、ニューヨークなどのアメリカ諸都市、さらに中南米、アジアの世界各地で近年誕生した大都市が、現代の都市像を決定している。そこでは、均一的な都市文化が支配し、都市市民は流行を追い、無自覚的な消費に溺れている。</p> <p>都市では騒音が溢れ、自然と結びついたかつての音環境は完全に失われてしまった。《サウンドスケープ・デザイン》はこのような音環境を再創造を試みる。またコンサートホールでの音楽に飽き足らない若者は、街頭に出て自らの身体を動かし、《パフォーマンス》に新しい音楽表現を求めた。</p>	鳴門教育大学 教授 本 田 皐 鳴門教育大学 助教授 久保田 慶 一

						<p>さらに都市には、世界各地の音楽が鳴り響き、《エスニック・ブーム》は近年いっそうの高まりを見せつつある。</p> <p>今、都市について考えることは、自らの文化的存在を問うことであり、音楽による都市論は、人間活動の根源とつながる音楽と人間の存在との関わりを問うことなのである。</p>	
--	--	--	--	--	--	--	--

◎ 受講生の応募等

テレビ講座 1,221名

ラジオ講座 725名

◎ スクーリング

(テレビ科目) 子どもの発達と教育

(ラジオ科目) 都市と音楽

実 施 場 所		実 施 日 時		
県 名	場 所		テレビ科目	ラジオ科目
徳島県	鳴門教育大学 徳 島 大 学	平成5年1月31日(日)	13:00～15:00	15:30～17:00
		平成5年2月7日(日)	13:00～15:00	15:30～17:00
香川県	香 川 大 学	平成5年1月31日(日)	13:00～15:00	15:30～17:00
愛媛県	愛 媛 大 学	平成5年1月31日(日)	13:00～15:00	15:30～17:00
高知県	高 知 大 学	平成5年2月7日(日)	13:00～15:00	15:30～17:00

◎ 再視聴

実施場所		実施期間・日時		
県	場 所	平成4年11月8日(日)	平成4年12月6日(日)	平成5年1月24日(日)
徳島県	鳴門教育大学 徳島大学	テレビ科目 第①回 13:00~13:45 第②回 13:50~14:35 第③回 14:40~15:25 第④回 15:30~16:15	テレビ科目 第⑤回 13:00~13:45 第⑥回 13:50~14:35 第⑦回 14:40~15:25 第⑧回 15:30~16:15	テレビ科目 第⑨回 13:00~13:45 第⑩回 13:50~14:35 第⑪回 14:40~15:25 第⑫回 15:30~16:15 第⑬回 16:20~17:05
		ラジオ科目 第①回 13:00~13:30 第②回 13:35~14:05 第③回 14:10~14:40 第④回 14:45~15:15	ラジオ科目 第⑤回 13:00~13:30 第⑥回 13:35~14:05 第⑦回 14:10~14:40 第⑧回 14:45~15:15	ラジオ科目 第⑨回 13:00~13:30 第⑩回 13:35~14:05 第⑪回 14:10~14:40 第⑫回 14:45~15:15 第⑬回 15:20~15:50
香川県	香川大学			
愛媛県	愛媛大学			
高知県	高知大学			